

動脈硬化発症に関与する危険因子を探る

○玉坂 洋子、紺野 知香、塚原 里美、蒲倉 典子、福島 京子、坂本 弘明、鈴木 順造
公益財団法人福島県保健衛生協会 総合健診センター

【はじめに】

動脈硬化とは、血管の内側にコレステロールなどが付着して血管が硬く狭くなり、血液の流れが悪くなった状態をいう。動脈硬化は全身の血管に生じ、さまざまな健康障害を引き起こす。脳への血液循環を担保する血管に障害が生じると脳梗塞を引き起こし、大動脈の硬化は解離性大動脈瘤の原因になって生命にまで影響を及ぼすことがある。今回、動脈硬化に関与する危険因子を知る目的で当総合健診センター受診者を対象とし動脈硬化の有無と食生活の関連性について検討したので報告する。

【対象】

2012年4月から2016年8月までに当センターを受診し、人間ドックのオプション検査である頸動脈超音波検査を受けた325名（男173名、女152名）を対象とした。

【方法】

人間ドックで得られた検査データをもとに、動脈硬化所見の有無、肥満度、腹囲、血圧、脂肪肝、HDL-C、LDL-C、血糖値、さらに問診事項から朝食抜き、飲酒、喫煙について、それぞれ比例ハザード法により相対危険率を算出し、P値0.05以下をもって有意差有りと判定した。

【結果】

頸動脈超音波を実施した325名中252名（77.5%）に動脈硬化の所見を認めた。男女別では男173名中128名（73.9%）、女152名中124名（81.5%） $P=0.75$ に動脈硬化所見を認めた。動脈硬化所見は年齢別にみると30歳代31名中16名（51.6%）、40歳代、93名中72名（77.4%）、50歳代145名中117名（80.6%）、60歳代48名中39名（81.2%）、70歳代8名中8名（100%）に認められた。

動脈硬化に関与する危険因子の検討では、肥満の相対危険率が 0.931 （ $P=0.5956$ ）、腹囲が 0.947 （ $P=0.695$ ）、血圧が 2.307 （ $P<0.0001$ ）、脂肪肝が 0.967 （ $P=0.833$ ）、HDL-Cが 0.955 （ $P=0.8543$ ）、LDL-Cが 0.835 （ $P=0.1489$ ）、血糖値が 2.315 （ $P<0.0001$ ）であり、問診項目である「朝食抜き」の相対危険率は 0.771 （ $P=0.1105$ ）、「毎日飲酒する」は 1.659 （ $P=0.0002$ ）、「喫煙している」は 1.715 （ $P=0.0002$ ）であった。

【まとめ】

- ①頸動脈超音波検査を受けた受診者の約70%に動脈硬化所見が認められた。
- ②男女別では有意差が認められなかった。
- ③年齢別でも有意差は認められなかった。
- ④動脈硬化に関与する危険因子としては、血圧、血糖値、問診による「毎日飲酒する」、そして「喫煙している」にそれぞれ有意差が認められた。

【考察】

今回の解析により、動脈硬化には血圧、血糖値、そして毎日の飲酒、喫煙が強く関連していることが示唆された。

今後、当人間ドックでの指導に際しては食生活、生活習慣の指導と共に、これら危険因子を保有する受診者には特に注意深い指導が必要であると考えられた。